

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御  
ころごし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに  
往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころにくくおぼしめしておわ  
しましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆし  
き学生たちおおく座せられてそろろうなれば、かのひとにもあいたてまつりて、往生の要  
よくよくきかるべきなり。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせを  
かぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

第5組 天正寺住職

## 嶋地正孝

text by Shoukou Shimati

### 第二章 「身命をかえりみずして」

#### 傍観者

『歎異抄』第二章は関東のお弟子方が「身命をかえりみず」して聖人の元を訪ね、それ  
に対して聖人が「往生浄土の道」は「ただ念仏」なのだとしらの信心を語る章になってい  
ます。ともすれば私達は歎異する人と歎異される人という構図で見がちですが、関東のお  
弟子方は念仏に生きているがゆえに「身命をかえりみず」に聖人の元に行かずにはおれな  
かったのです。傍観者とは念仏の教えは学ぶけど念仏に生きることのない者、また身命は  
守るけど身命を捨ててでも聞かずにおれない問なき者なのでしょう。

#### 私達の念仏

聖人は「私がいただいている念仏は浄土に生まれるためのたね（種因）でもなく、地獄  
に落ちるしかない身（業因）を畏れるがゆえの念仏でもない」と言われます。念仏は浄土  
に生まれるための手段ではないのです。しかし、私が申す念仏はすべて手段になってしま  
います。なぜなら私が主だからです。聖人は「よき人」の言葉に「汝」と呼びかけられて  
いかれました。「汝一心に正念して直ちに來れ、我よく汝を護らん」という弥陀の招喚を人  
生の主としたのです。『愚禿鈔』に「汝の言は行者なり、これすなわち必定の菩薩と名づく」  
と了解されています。「汝」とは念仏に生き、この身と世を課題とする者なのでしょう。そ  
こで明らかになった身の事実が「いずれの行もおよびがたき身」なのです。それは、私に  
は修行できる力はありませんということではなく、仏教に出会いながら内も外も、仏さえ  
も利用せんという心しかなく、仏に成りたいという心さえありませんでしたという悲歎で  
あり、その身を問い揺り動かしてくる本願招喚の勅命に遇い得た感動の言葉なのでしょう。

#### 日頃の心

『歎異抄』第十六章に「日ごろのころにては、往生かなうべからず」とあります。「日  
ごろのころ」とは自分のことは自分の心がけ、努力次第でなんとでもなるという心です。  
念仏に生きることがなければ当たり前のことです。しかし、念仏に生きんとした時、私を  
主とする心から一歩も出ることができない身に驚き、この身と心を念仏に聞いていく歩み

が始まるのです。聖人は関東から訪ねて来られずにいられなかった心を「御ころごし」と言われます。それは旅の苦勞をねぎらった言葉ではなく、一人一人の上に生きてはたらいっている念仏を見ておられたのでしょう。『教行信証』の後序に「信順を因とし疑謗を縁として」とあります。私達は念仏の中に疑って生きています。しかし、果遂の誓いゆえに疑いがそのまま信心を明らかにしていく歩みとなる。その信心とは対象的に阿弥陀仏を信ずることではなく、「汝」という呼びかけの中に疑ってやまない自身をたまわり続けていくことのないのです。

#### あらためて傍観者とは

傍観者とは自分を主とし、自他分別して、自他共に利用し、仏法さえも手段にしていく者です。その意味で難行に励んでいる方も傍観者なのでしょう。それは自力の道なるがゆえに必ず後悔と愚癡が伴います。「汝」と呼ばれ、問われていく往生極樂の道を歩む時、後悔と愚癡さえも身の事実としてたまわっている。仏法に苦勞している。すでに「身命をかえりみ」ざる道として念仏がとどいている。私達が歎異されている者として念仏に出遇っているか、問われているのです。